うらうすぶんの
ひとりの夢

1人／浦臼の夢

19

私たちの浦臼には誇らしい特産品や風景が数多くあります。
それらをつくるのは一人ひとりの仕事や取り組みです。
この連載では浦臼の誇りをかたちにしている様々な人の思いを紹介します。

森川 勇樹 さん

冬の体育館 心弾む場に

子どもが体を動かす場を残したい

浦臼で生まれ、浦臼で育ちました。高校を出てからすぐに農業の道へ入りました。アメリカに渡って一年研修をし、帰国後は滝川の農業試験場で三年働き、その後自分の家、自分の町でやると決めていた農業に就きました。

就農してから町のサッカー少年団でコーチをしていて、体を動かすことがずっと生活の一部でした。

しばらくして少年団が人数不足で活動できなくなり、**浦臼から球技の団体がなくなってしまったことが心残りでした。**

ちょうど自分の子どもが小学生に上がる時期でもあって、六年前から町のなかでスポーツ少年団を立ち上げました。

「もう一度、子どもたちが体を動かせる場を作りたい」と思ったんです。サッカー以外にも地域の大人たちの得意なことを持ち寄ってトランポリンやバレーボールも始めました。

社会人サッカーチーム時代の仲間が四人いて、当初から心強いメンバーです。農閑期の冬の間、サッカーを基本にしながら、バドミントンやバスケット、テニス、ドッジボールなど、様々な競技を取り入れています。参加費や申込は不要、子どもたちが来れる時だけでいい。**とにかく楽しんで体を動かせる場を目指しています。**

地域の大人に褒められて、自信がつく

いろんな競技に触れて、自分に合った「楽しい」を見つけてほしい。勝敗よりも、「体を動かす喜び」を感じてほしいんです。

年齢が違う子が一緒に過ごすと、自然に助け合いが生まれます。信頼関係があるからサッカーでは小さな子が思い切って大きな子に向かっていく姿も見れます。勝つことが目的じゃないから、自分たちで工夫して、相手を思いやりながらプレーする姿を見るのがうれしいです。

スポーツを通じて大事だと思うのは、「親以外の大人に褒められる」経験です。

自分が子どもの頃、友達の親に褒められた言葉を今でも覚えています。その一言がすごく励みになった。今の時代は、親以外の大人に見てもらえる機会が減っている気がします。この少年団では地域の大人が一緒にプレーして、子どもたちを見て、褒めてくれる。

地域の関係性は、親や友だちのようなタテヨコではない、ナナメの関係です。**ここから生まれる新しい視点で評価されると、子どもたちは自信をつけることができるんだと思います。**

役場の職員さんや地域の人たちも協力してくれて、いろんな競技を教えに来てくれます。

子どもたちは知り合った大人をあだ名で呼ぶくらい仲良くなって、言葉をかけ合います。その空気を見ているだけで幸せになります。

「楽しい」をもっと分かち合えたら

夜勤で除雪の仕事がある日は、スポーツ少年団が終わってから出勤することもあります。正直、体は疲れるけれど、子どもたちの笑顔を見たくて頑張れます。自分が体を動かすのが好きだから、やれているんだと思います。

この町で、子どもたちが体を動かせる場所を残したい。スポーツが好きで、楽しいと思える子がひとりでも増えたら、それで十分です。もし他の競技を教えられる人がいたら、ぜひ一緒にやってほしいです。

毎週金曜の夜、体育館に響くボールの音や笑い声を聞いていると、この町にはまだまだ可能性があると思えるんです。小さな町ですが、自分が楽しいと思えることを他の人と分かち合うことができたら。もっといい町になると、僕は信じています。

森川 勇樹（もりかわ ゆうき）さん●1981年生まれ。浦臼町出身。毎年10月から3月まで海洋センターで開催される冬季スポーツ少年団の発起人。小学1年生から高校まで12年間サッカーを続け、現在もフットサルチームに所属。年少から小6まで4児の父であり、末っ子まであと9年は小学生パパ生活が続く。